

運

芥川龍之介

青空文庫

目のあら^{すだれ}い簾が、入口にぶらさげてあるので、往来の容子^{ようす}は仕事場にいても、よく見えた。清水^{きよみづ}へ通う往来は、さつきから、人通りが絶えない。金鼓^{こんく}をかけた法師^{ほうし}が通る。壺装束^{つぽしやうぞく}をした女が通る。その後^{あと}からは、めずらしく、黄牛^{あめうし}に曳^ひかせた網代^{あじろぐ}車^{くるま}が通った。それが皆^{まばら}、疎^がな蒲^がの簾^{すだれ}の目を、右からも左からも、来たかと思うと、通りぬけてしまう。その中で変らないのは、午後の日が暖かに春^{あぶ}を炙^{あぶ}っている、狭い往来の土の色ばかりである。その人の往来を、仕事場の中から、何と云う事もなく眺^あめていた、一人の青^{あおざむらい}侍^いが、この時、ふと思いついたように、主^{あるじ}の陶^す器^{えい}師^しへ声をかけた。

「あいかわらず不相変、かんのんさま観音様へ参詣する人が多いようだね。」

「左様でございます。」

すえものつくり

陶器師は、仕事に氣をとられていたせい、少し迷惑そうに、こう答えた。が、これは眼の小さい、鼻の上を向いた、どこかひょうきんな所のある老人で、顔つきにも容子ようすにも、悪気らしいものは、微塵みじんもない。着ているのは、麻あさの帷子かたびらであろう。それに萎なえた揉烏帽子もみえぼしをかけたのが、この頃評判の高い鳥羽僧正とばそうじようの絵巻の中の人物を見るようである。

「私も一つ、日参につさんでもして見ようか。こう、うだつが上らなく

ちや、やりきれない。」

「御冗談ごじようだんで。」

「なに、これで善い運が授さずかるとなれば、私だって、信心をするよ。日参をしたって、参籠さんろうをしたって、そうとすれば、安いものだからね。つまり、神仏を相手に、一商売をするようなものさ。」

青侍は、年相応うわちようしな上調子なものの言いをして、下唇なを舐めながら、きよろきよろ、仕事場の中を見廻した。——竹藪たけやぶを後うしろにして建てた、藁葺わらぶきのあばら家やだから、中は鼻がつかえるほど狭い。が、簾かめの外の往来が、目まぐるしく動くのに引換えて、ここでは甕かめでも瓶子へいしでも、皆あか緒ちやけた土器かわらけの肌はだをのどかな春風に吹かせながら、百年も昔からそうしていたように、ひっそりかんと静まっている。どうやらこの家の棟むねばかりは、燕つばめさえも巢を食わな

いらしい。……

おきな翁が返事をしないので、青侍はまた語を継いだ。

「お爺さんなんでも、この年までには、随分いろんな事を見たり聞いたりしたろうね。どうだい。観音様は、ほんとうに運を授けて下さるものかね。」

「左様でございます。昔は折々、そんな事もあつたように聞いて居りますが。」

「どんな事があつたね。」

「どんな事と云つて、そう一口には申せませんがな。——しかし、あなた貴方がたは、そんな話をお聞きなすつても、格別面白くもございませんまい。」

「可哀そうに、これでも少しは信心しんじんぎのある男なんだぜ。いよいよ運が授かるとなれば、明日あすにも――」

「信心気でございますかな。商売気でございますかな。」

翁おきなは、眦めじりに皺しわをよせて笑った。捏こねていた土が、壺つぼの形になったので、やっと気が楽になったと云う調子である。

「神仏の御考えなどと申すものは、貴方あなたがたくらいのお年では、中々わからないものでございますよ。」

「それはわからなからうさ。わからないから、お爺さんに聞くん
だあね。」

「いやさ、神仏が運をお授けになる、ならないと云う事じゃございません。そのお授けになる運の善し悪しと云う事が。」

「だって、授けて貰えばわかるじゃないか。善い運だとか、悪い運だとか。」

「それが、どうも貴方がたには、ちとおわかりになり兼ねましようて。」

「私には運の善し悪しより、そう云う理窟の方がわからなそうだね。」

日が傾き出したのであろう。さつきから見ると、往来へ落ちる物の影が、心もち長くなった。その長い影をひきながら、頭に桶をのせた物売りの女が二人、簾の目を横に、通りすぎる。一人は手に宿への土産らしい桜の枝を持っていた。

「今、西の市で、績麻の酈を出している女なぞもそうでございま

すが。」

「だから、私はさつきから、お爺さんの話を聞きたがつていないか。」

二人は、暫くの間、黙った。青侍は、爪で頤あごのひげを抜きながら、ぼんやり往来を眺めている。貝殻のように白く光るのは、大お方おかたさつきの桜の花がこぼれたのであろう。

「話さないかね。お爺さん。」

やがて、眠そうな声で、青侍が云った。

「では、御免を蒙って、一つ御話し申しましょうか。また、いつもの昔話でございしますが。」

こう前置きをして、陶器師すえものつくりの翁は、徐おもむろに話し出した。日の

長い短いも知らない人でなくては、話せないような、悠長な口ぶりで話し出したのである。

「もうかれこれ三四十年前になりました。あの女がまだ娘の時に、この清水きよみずの観音様へ、願がんをかけた事がございました。どうぞ一生安樂に暮せますようにと申しましてな。何しろ、その時分は、あの女もたった一人のおふくろに死別しにわかれた後で、それこそ日々の暮しにも差支えるような身の上でございましたから、そう云う願がんをかけたのも、満更無理はございません。

「死んだおふくろと申すのは、もと白朱社はくしゅしゃの巫子みこで、一しきりは大そう流行はやったものでございますが、狐きつねを使うと云う噂うわさを立てられてからは、めつきり人も来なくなってしまうたようでございます

ます。これがまた、白あばたの、年に似合わず水々しい、大がらかな婆さんでございましたな、何さま、あの容子ようすじゃ、狐どころか男でも……」

「おふくろの話よりは、その娘の話を伺いたいね。」

「いや、これは御挨拶で。——そのおふくろが死んだので、後は娘一人の痩せ腕やうででございますから、いくらかせいでも、暮くらの立てられようがございませぬ。そこで、あの容貌きりようのよい、利発者りはつものの娘が、お籠こもりをするにも、檻つづね褌故に、あたりへ気がひけると云う始末でございました。」

「へえ。そんなに好いい女だったかい。」

「左様でございます。氣だてと云い、顔と云い、手前の欲目では、

まずどこへ出しても、恥しくないと思いましたがな。」

「惜しい事に、昔さね。」

青侍は、色のさめた藍の水干すいかんの袖口を、ちよいとひっぱりながら、こんな事を云う。翁は、笑声を鼻から抜いて、またゆつくり話しつづけた。後の竹藪うしろでは、頻しきりうぐいすに鶯が啼いている。

「それが、三七日さんしちにちの間、お籠りをして、今日が満願と云う夜よに、ふと夢を見ました。何でも、同じ御堂おどうに詣まつていた連中の中に、背むしの坊主ぼうずが一人いて、そいつが何か陀羅尼だらにのようなものを、くどくど誦ずしていたそうでございます。大方それが、気になったせいでございましょう。うとうと眠気がさして来ても、その声ばかりは、どうしても耳をはなれませぬ。とんと、縁の下で蚯蚓みみずで

も鳴いているような心もちで——すると、その声が、いつの間にもやら人間の語ことばになつて、『ここから帰る路で、そなたに云いよる男がある。その男の云う事を聞くがよい。』と、こう聞えると申すのでございますな。

「はつと思つて、眼がさめると、坊主はやつぱり陀羅尼三昧だらにさんまいでございます。が、何と云っているのだから、いくら耳を澄ましても、わかりませぬ。その時、何気なく、ひよいと向うを見ると、常じょう夜燈やとうのぼんやりした明りで、観音様の御顔が見えました。日頃おが拝みなれた、端たん嚴ごん微妙みみょうの御顔でございますが、それを見ると、不思議にもまた耳もとで、『その男の云う事を聞くがよい。』と、誰だか云うような気がしたそうでございます。そこで、娘はそれ

を觀音様の御告だと、一図いちずに思いこんでしまいましたげな。」

「はてね。」

「さて、夜がふけてから、御寺を出て、だらだら下りの坂路を、五条へくだろうとしますと、案の定じようぢう後から、男が一人抱きつきました。丁度、春さきの暖い晩でございましたが、生憎あいにくの暗で、相手の男の顔も見えなければ、着ている物などは、猶なほの事わかりませぬ。ただ、ふり離そうとする拍子に、手が向うの口髭くちひげにさわりました。いやはや、とんだ時が、満願まんがんの夜に当ったものでございます。

「その上、相手は、名を訊きかれても、名を申しませぬ。所を訊かれても、所を申しませぬ。ただ、云う事を聞けと云うばかりで、

坂下の路を北へ北へ、抱きすくめたまま、引きずるようにして、つれて行きます。泣こうにも、喚わめこうにも、まるで人通りのない時分なのだから、仕方がございませぬ。」

「ははあ、それから。」

「それから、とうとう八坂寺やさかであらの塔の中へ、つれこまれて、その

晩はそこですごしたそうでございます。——いや、その辺へんの事なら、何も年よりの手前などが、わざわざ申し上げるまでもございますまい。」

おきな

めじりしわ

翁は、また眦めじりしわに皺をよせて、笑った。往来の影は、いよいよ長くなつたらしい。吹くともなく渡る風のせいであろう、そこここに散っている桜の花も、いつの間にかこつちへ吹きよせられて、

今では、雨落ちの石の間に、点々と白い色をこぼしている。

「冗談云っちゃいけない。」

青侍は、思い出したように、頤あごのひげを抜き抜き、こう云った。

「それで、もうおしまいかい。」

「それだけなら、何もわざわざお話し申すがものはございませぬ。
」翁おきなは、やはり壺つぼをいじりながら、「夜があげると、その男が、
こうなるのも大方宿世すくせの縁だろうから、とても事に夫婦みょうとにな
つてくれと申したそうでございます。」

「成程。」

「夢の御告げでもないならともかく、娘は、観音様のお思召おぼしめし
通りになるのだと思ったものでございますから、とうとう首かぶりたてを豎

にふりました。さて形かたばかりの盃さかずき事をすませると、まず、当座の用にと云つて、塔の奥から出して来てくれたのが綾あやを十足びきに絹を十疋でございます。——この真似まねばかりは、いくら貴方あなたにもちとむずかしいかも存じませんな。」

青侍は、にやにや笑うばかりで、返事をしない。鶯も、もう啼かなくなつた。

「やがて、男は、日の暮くれに帰ると云つて、娘一人を留守居るすいに、慌あわただしくどこかへ出て参りました。その後の淋あとしさは、また一倍でございます。いくら利発者でも、こうなると、さすがに心細くなるのでございましょう。そこで、心晴らしに、何気なにげなく塔の奥へ行つて見ると、どうでございましょう。綾や絹は愚おろかな事、珠玉とか

砂金^{さきん}とか云う金目^{かねめ}の物が、皮匣^{かわび}に幾つともなく、並べてあると云うじやございませぬか。これにはああ云う氣丈な娘でも、思わす肚胸^{とむね}をついたそうでございます。

「物にもよりますが、こんな財物^{たから}を持っているからは、もう疑^{うたが}はございませぬ。引剥^{ひはぎ}でなければ、物盜^{ものど}りでございます。——そう思うと、今まではただ、さびしいだけだったのが、急に、怖いのも手伝つて、何だか片時^{かたとき}もこうしては、いられないような氣になりました。何さま、悪く放免^{ほうめん}の手にでもかかろうものなら、どんな目に遭^あうかも知れませぬ。

「そこで、逃げ場をさがす氣で、急いで戸口の方へ引返そうと致しますと、誰だか、皮匣^{かわび}の後^{うしろ}から、しわがれた声で呼びとめまし

た。何しろ、人はいないとばかり思っていた所でございますから、驚いたの驚かないのじゃございませぬ。見ると、人間とも海鼠なまこともつかないようなものが、砂金の袋を積んだ中に、円まるくなつて、坐つて居ります。——これが目くされの、皺しわだらけの、腰のまがつた、背の低い、六十ばかりの尼法師あまほうしでございました。しかも娘の思惑おもわくを知つてか知らないでか、膝ひざで前へのり出しながら、見かけによらない猫撫声ねこなでごえで、初対面の挨拶あいさつをするのでございます。

「こつちは、それ所の騒さわぎではないのでございますが、何しろ逃げようと云う巧みたくみをけどられなどしては大変だと思つたので、しぶ皮匣かわごこの上に肘ひじをつきながら心にもない世間話をはじめまし

た。どうも話の容子ようすでは、この婆さんが、今までの男の炊女みずしが何かつとめていたらしいのでございます。が、男の商売の事になると、妙に一口も話しませぬ。それさえ、娘の方では、気になるのに、その尼あまがまた、少し耳が遠いと来ているものでございますから、一つ話を何度となく、云い直したり聞き直したりするので、こっちはもう泣き出したいほど、気がじれます。――

「そんな事が、かれこれ午ひるまでつづいたでございましょう。すると、やれ清水の桜が咲いたの、やれ五条の橋はし普請ぶしんが出来たのと云っている中うちに、幸い、年の加減かげんか、この婆さんが、そろそろ居い睡ねむりをはじめました。一つは娘の返答が、はかばかしくなかったせいもあるのでございましょう。そこで、娘は、折を計って、相

手の寝息を窺^{うかが}いながら、そつと入口まで這^はつて行つて、戸を細目にあけて見ました。外にも、いい案配に、人のけはいはございませぬ。――

「ここでそのまま、逃げ出してしまえば、何事もなかったのございますが、ふと今朝貰^{けさ}った綾と絹との事を思い出したので、それを取りに、またそつと皮匣^{かわご}の所まで帰つて参りました。すると、どうした拍子か、砂金の袋にけつまずいて、思わず手が婆さんの膝^{ひざ}にさわつたから、たまりませぬ。尼の奴め驚いて眼をさますと、暫くはただ、あつけにとられて、いたようでございますが、急に氣ちがいのようになつて、娘の足にかじりつきました。そうして、半分泣き声で、早口に何かしやべり立てます。切れ切れに、語^{ことば}が

耳へはいる所では、万一娘に逃げられたら、自分がどんなひどい目に遇うかも知れないと、こう云っているらしいのでございます。が、こつちもここにいては命にかかわると云う時でございますから、元よりそんな事に耳をかす訳がございませぬ。そこで、とうとう、女同志のつかみ合がはじまりました。

「打つ。蹴^ける。砂金の袋をなげつける。——梁^{はり}に巢^{ねずみ}を食った鼠も、落ちそうな騒ぎでございます。それに、こうなると、死物狂いだけに、婆さんの力も、莫^ば迦^かには出来ませぬ。が、そこは年のちがいでございます。間もなく、娘が、綾と絹とを小脇^{こわき}にかかえて、息を切らしながら、塔の戸口をこつそり、忍び出た時には、尼^{あま}はもう、口もきかないようになって居りました。これは、後^{あと}で

聞いたのでございますが、死骸しがいは、鼻から血を少し出して、頭から砂金を浴びせられたまま、薄暗い隅の方に、仰向けあおもむになつて、
 臥ねていたそうでございます。

「こつちは八坂寺やさかでらを出ると、町家ちやうかの多い所は、さすがに氣が
 さしたと見えて、五条京極きやうごく辺の知人しりびとの家をたずねました。

この知人と云うのも、その日暮しの貧乏人なのでございますが、
 絹の一疋もやったからでございましょう、湯を沸かすやら、粥かゆを
 煮るやら、いろいろ経営けいえいしてくれたそうでございます。そこで、
 娘ようやも漸く、ほつと一息つく事が出来ました。」

「私も、やつと安心したよ。」

青侍あおざむらいは、帯にはさんでいた扇おあぎをぬいて、簾すだれの外の夕日を眺

めながら、それを器用に、ぱちつかせた。その夕日の中を、今しがた白^{はくちよう}丁が五六人、騒々しく笑い興じながら、通りすぎたが、影はまだ往来に残っている。……

「じやそれでいよいよけりがついたと云う訳だね。」

「所が」翁^{おきな}は大^{おおき}仰^{よう}に首を振って、「その知^{しり}人^{びと}の家に居りま

すと、急に往来の人通りがはげしくなつて、あれを見い、あれを見いと、罵^{のの}り合う声が聞えます。何しろ、後^{うしろ}暗^{くら}い体ですから、

娘はまた、胸を痛めました。あの物盗^{もの}りが仕返ししにでも来たものか、さもなければ、検非違使^{けびい}の追手^{おつて}がかかりでもしたもののか、

——そう思うともう、おちおち、粥^{かゆ}を啜^{すす}つても居られませぬ。」

「成程。」

「そこで、戸の隙間すきまから、そつと外を覗いて見ると、見物の男なんに女よの中を、放免ほうめんが五六人、それに看督長かどのおさが一人ついて、物々しげに通りました。それからその連中にかこまれて、縄にかかった男が一人、所々裂さけた水干を着て烏帽子えぼしもかぶらず、曳かれ参ります。どうも物盗りを捕えて、これからその住家すみかへ、実録じつろくをしに行く所らしいのでございますな。

「しかも、その物盗りと云うのが、昨夜ゆうべ、五条の坂で云いよつた、あの男だそうじゃございませぬか。娘はそれを見ると、何故か、涙がこみ上げて来たそうでございます。これは、当人が、手前と話しました——何も、その男に惚ほれていたの、どうしたのと云う訳じやない。が、その縄目なわめをうけた姿を見たら、急に自分で、自

分がいじらしくなって、思わず泣いてしまったと、まあこう云うのでございますがな。まことにその話を聞いた時には、手前もつくづくそう思いましたよ——」

「何とね。」

「観音様へ願がをかけるのも考え物だとな。」

「だが、お爺じいさん。その女は、それから、どうにかやって行けるようになったのだろう。」

「どうか所か、今では何不自由ない身の上になって居ります。その綾や絹を売ったのを本もとに致しましてな。観音様も、これだけは、御約束をおちがえになりません。」

「それなら、そのくらいな目に遇つても、結構じゃないか。」

外の日の光は、いつの間にか、黄いろく夕づいた。その中を、風だった竹藪の音が、かすかながらそこから聞えて来る。往來の人通りも、暫くはとだえたらしい。

「人を殺したって、物盗りの女房になつたって、する氣でしたんでなければ仕方がないやね。」

青侍は、扇を帶へさしながら、立上つた。翁おきなも、もう提ひさげの水で、泥にまみれた手を洗っている——二人とも、どうやら、暮れてゆく春の日と、相手の心もちとに、物足りない何ものかを、感じてでもいるような容子ようすである。

「とにかく、その女は仕合せ者だよ。」

「御冗談で。」

「まったくさ。お爺さんも、そう思うだろう。」

「手前でございますか。手前なら、そう云う運はまっぴらでございますな。」

「へええ、そうかね。私なら、二つ返事で、授^{さず}けて頂くがね。」

「じゃ観音様を、御信心なさいまし。」

「そうそう、明日^{あす}から私も、お籠^{こもり}でもしようよ。」

（大正五年十二月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

運

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>